

二〇一六年一〇月七日

秋うららラジオ聞きつつ波止に釣る
リースカーテンを貫く秋日かな

やよい
なおこ

二〇一六年一〇月六日

色変へぬ松砦とす御陵かな
修験者の錫杖ひびく秋山路
大梯子下りてのぼりて松手入
製鉄の街見下ろして山粧ふ
係船の舷たたく秋の潮
子ら帰る自転車の輪に草紅葉
蜻蛉の翔ちては戻る潦

たか子
宏 虎
なつき
菜 々
やよい
智恵子
ひかり

二〇一六年一〇月五日

ほろほろと湖面にこぼす萩の屑
秋霖の杜の走り根苔まみれ
映画館客四五人や台風裡
長雨に耐へかねて臥す稲田かな
角隠し渡る廊下に菊薫る
身に入むや原爆写真みなセピア
核心の話に止まる扇かな

ま ゆ
ひかり
やよい
ひかり
智恵子
なつき
宏 虎

二〇一六年一〇月四日

里山に飛び火のごとく櫨紅葉
秋晴れに扉を全開す大法堂
佇つ我に刃向かふ構へいぼむしり
吟行の家苞に買ふ能勢の栗
宇治の瀬を掠めかすめて石たたき

ま ゆ
はく子
治 男
ひかり
菜 々

二〇一六年一〇月三日

山門に傘をたためる秋の人
ひとところ湖畔に燃ゆる櫨紅葉
庭草の伸び放題や秋愁ふ
這松の群落駆けて霧走る
四方山の話は尽きず敬老会
曇天を明るうしたりそばの花
銀杏の実を踏むまじと爪立ちに

なつき
ま ゆ
よし女
明日香
ま ゆ
隆 松
たか子

二〇一六年一〇月二日

穂薄をのけぞらし過ぐ列車かな
秋風裡高原バスは窓開けて
稲稔る四囲の山々砦とし
枝から枝へリス忙しき森の秋
太い腹ひきづりあるくいぼむしり
山野辺に摘みしを卓に吾亦紅

ともえ
明日香
菜 々
智恵子
三 刀
ま ゆ

二〇一六年一〇月一日

竹林はいまし虫の音楽会
廃線の鉄路を隠す草紅葉
秋風に揺れどほしなる千灯明
落人の越えしこの淵秋深む
萩の花しぼるがごとく雨雫

せいじ
智恵子
さつき
治 男
せいじ

毎日句会みのる選・二〇一六年一〇月九日